

Rec'd PCT/PTO 17 MAY 2005 #2

10/53273 PCT/JP 2004/002714

日本国特許庁
JAPAN PATENT OFFICE

04. 3. 2004

別紙添付の書類に記載されている事項は下記の出願書類に記載されている事項と同一であることを証明する。

This is to certify that the annexed is a true copy of the following application as filed with this Office.

出願年月日 2003年 3月18日
Date of Application:

出願番号 特願2003-073720
Application Number:
[ST. 10/C]: [JP 2003-073720]

REC'D 22 APR 2004

WIPO

PCT

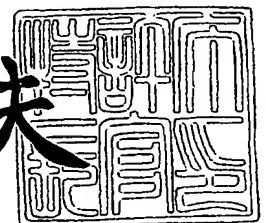
出願人 日本電信電話株式会社
Applicant(s):

PRIORITY
DOCUMENT
SUBMITTED OR TRANSMITTED IN
COMPLIANCE WITH RULE 17.1(a) OR (b)

2004年 4月 9日

特許庁長官
Commissioner,
Japan Patent Office

今井康夫



BEST AVAILABLE COPY

出証番号 出証特2004-3029237

【書類名】 特許願

【整理番号】 NTTH147105

【提出日】 平成15年 3月18日

【あて先】 特許庁長官 殿

【国際特許分類】 H03K 3/014

【発明者】

 【住所又は居所】 東京都千代田区大手町二丁目 3 番 1 号
 日本電信電話株式会社内

 【氏名】 大友 祐輔

【特許出願人】

 【識別番号】 000004226

 【氏名又は名称】 日本電信電話株式会社

【代理人】

 【識別番号】 100075753

 【弁理士】

 【氏名又は名称】 和泉 良彦

 【電話番号】 03-3214-0502

【選任した代理人】

 【識別番号】 100081341

 【弁理士】

 【氏名又は名称】 小林 茂

 【電話番号】 03-3214-0502

【手数料の表示】

 【予納台帳番号】 084480

 【納付金額】 21,000円

【提出物件の目録】

 【物件名】 明細書 1

 【物件名】 図面 1

 【物件名】 要約書 1

【包括委任状番号】 0207046

【プルーフの要否】 要

【書類名】 明細書
【発明の名称】 CDR回路
【特許請求の範囲】

【請求項1】

位相比較回路、チャージポンプ回路、ループフィルタを有する、入力データに対して半分のレートのクロックで動作するハーフレートCDR回路において、

上記位相比較回路は、クロックの立ち上がりエッジあるいは立ち下がりエッジの少なくとも一方に対して上記入力データの遷移点エッジの位相差を検出し、該検出した位相差信号を出力する2つの位相差判定信号線と、上記クロックに対応したデータ周期信号を出力する2つのデータ周期信号線とを有し、

上記チャージポンプ回路として上記各位相差判定信号線と上記各データ周期信号線とにそれぞれ接続した2つのチャージポンプ回路を有し、

上記位相差判定信号線を流れるパルス幅と位相差との関係が一定となるように、上記位相差判定信号線を介して上記ループフィルタに信号を送り込むための上記チャージポンプ回路の出力であるソース電流と、上記ループフィルタからデータ周期信号線に流れるシンク電流との比を補正することを特徴とするCDR回路。

【請求項2】

上記2つの位相差判定信号線は、正相および逆相のクロック信号の立ち上がりエッジにそれぞれ同期した位相差信号を出力する信号線であり、上記2つのデータ周期信号出力線は、上記正相および逆相のクロック信号の立ち上がりエッジにそれぞれ同期したデータ周期信号を出力する信号線であることを特徴とする請求項1に記載のCDR回路。

【請求項3】

請求項1のCDR回路において、

前記チャージポンプ回路が、前記ソース電流と前記シンク電流との比を調整するための外部電圧により制御される電流供給手段を有していることを特徴とするCDR回路。

【発明の詳細な説明】

【0001】

【発明の属する技術分野】

本発明は、光通信の受信器に用いられるCDR（クロックアンドデータリカバリ）回路に関し、特に、入力データの半分の周波数をもつハーフレートクロックを使用し、高速なデータからクロックを抽出するCDR回路に関する。

【0002】

【従来の技術】

【非特許文献1】 A 10Gb/s CMOS Clock and Data Recovery Circuit with a Half-Rate Linear Phase Detector, Jafar Savoj and Behzad Razavi, IEEE Journal of Solid-State Circuits, vol.36, No.5, pp.761-769, May 2001, Fig. 1.

従来のハーフレート型CDR回路のブロック図を図6に示す。従来のCDR回路は、位相比較回路PDあるいは位相周波数比較回路PFD、チャージポンプ回路CP、ループフィルタLOF（R1、R2、C1）、両相単相電圧変換回路DSC、電圧制御発振回路VCOからなる。位相比較回路PDは、図7の動作タイミング図に示すように、入力データDinの遷移点エッジとクロックCKの立ち上がり、あるいは立ち下がり点のエッジ間の位相差を表すerror信号を出力する1本の信号線と、データの周期を表すref信号を出力する1本の信号線とを有する。従来のCDR回路では、error信号のパルス幅は、位相同期状態すなわちロック時で $T/2$ （Tはデータ周期）である。入力データDinの位相がクロックCKの立ち上がりまたは立ち下がりエッジに対して遅れると（図7においてDinが右にシフト）、error信号のパルス幅は狭くなり $T/2$ から0に近づき極めて細いパルスとなる。また、入力データDinの位相がクロックCKの立ち上がりまたは立ち下がりエッジの位相が進むと、error信号のパルス幅は広くなり $T/2$ からTに近づき、error信号におけるパルスの間隔が極めて狭くなる。error信号とref信号は次段のチャージポンプ回路CPに入力し、error信号がhigh（すなわち論理“1”）の間、図6において両相単相電圧変換回路DSCに信号線vcont+を介して電流を流し込み、信号線vcont-から電流を引き出す。また、ref信号がhighの間、

信号線 v_{cont-} に電流を流し込み、信号線 v_{cont+} から電流を引き出す。信号線 v_{cont+} および v_{cont-} は、ループフィルタ LOF を形成している抵抗 R_1 と抵抗 R_2 それぞれの片端に各々接続する。

【0003】

位相がロックした状態では、 $error$ 信号が $high$ の時間にループフィルタ LOF の容量 C_1 に流れ込む総電荷量と、 ref 信号が $high$ の時間に同じ容量 C_1 から流れ出る総電荷量とが釣り合い、信号線 v_{cont+} と v_{cont-} 間の電位差が一定になる。一方、入力データ D_{in} のデータ遷移点エッジ間の中央位置に対してクロック CK の立ち上がり位置の位相が進んでいる時は、 $error$ 信号が $high$ である幅が広がり、チャージポンプ CP の出力に接続されている信号線 v_{cont+} と v_{cont-} との電位差がプラス側に増加する。また、入力データ D_{in} のデータ遷移点エッジ間の中央位置に対してクロック CK の立ち上がり位置の位相が遅れている時は、 $error$ 信号が $high$ である幅が狭まり、信号線 v_{cont+} と v_{cont-} の電位差がマイナス側に増加する。信号線 v_{cont+} と v_{cont-} とは両相単相電圧変換回路 DSC の入力に接続されており、両相単相電圧変換回路 DSC はこれら信号線 v_{cont+} と v_{cont-} との電位差を出力側の信号線 v_{cont} の電圧レベルに変換する。信号線 v_{cont+} と v_{cont-} との電位差がプラス側に大きくなると出力 v_{cont} の電位は上がり、信号線 v_{cont+} と v_{cont-} との電位差がマイナス側に大きくなると出力側の信号線 v_{cont} の電位は下がる。ロック時は出力側の信号線 v_{cont} の電位は一定値になる。両相単相電圧変換回路 DSC の出力側の信号線 v_{cont} は、電圧制御発振回路 VCO に接続されている。電圧制御発振回路 VCO は、データ周期 T に対して、周波数 $f/2 (= 1/(2 * T))$ 近傍の周波数で発振し、その周波数のクロック CK を出力する。両相単相電圧変換回路 DSC 出力側の信号線 v_{cont} の電圧が高くなると周波数は上がり、 v_{cont} が低い電圧になると周波数は下がる。

以上のように、位相比較回路 PD で検出した入力データ D_{in} とクロック CK の位相差が電圧制御発振回路 VCO の発振周波数に反映され、クロック CK の位相変化が位相比較回路 PD にフィードバックされる。これにより、クロック CK

の立ち上がりまたは立ち下がりエッジが入力データ D_{in} の中央に位置するロック状態に引き込みを行う CDR 機能が実現される。

【0004】

【発明が解決しようとする課題】

以上述べたような、従来の CDR 回路の問題点は、位相比較回路の出力である $error$ 信号が極めて細いパルスになる場合があることである。従来の CDR 回路では、 $error$ 信号はデータの遷移点のエッジとその直後に来るクロックのエッジとの時間幅を排他的論理和によりパルスとして取り出している。このため、図 7 の動作タイミング図に示すように、入力するデータ D_{in} の 1 周期が T_{sec} 、速度が $f/2\text{ Hz}$ (クロック換算) であるとする、 $error$ 信号のパルス幅は $0.5 * T$ より細くなる場合があり、回路に要求される動作速度は周波数換算で $f\text{ Hz}$ 以上となる。したがって、従来の CDR 回路を実現するためには、入力するデータ速度の 2 倍以上の速度で動作可能な素子を用いて位相比較回路、チャージポンプ回路等を製造しなければならない欠点があった。本発明においては、位相比較回路およびチャージポンプ回路の動作速度のような制限を緩和し、高速なデータ入力に対しても安定したクロック抽出機能とデータ整形機能を有する CDR 回路を提供することを目的とする。

【0005】

【課題を解決するための手段】

上記目的を達成するために、本発明の CDR 回路においては従来の CDR 回路と異なり、以下の各項を特徴としている。

- 1) 位相比較回路から正逆兩位相のクロックに対する $error$ 信号を 2 つ出力し、それぞれにチャージポンプ回路を接続し、そのチャージポンプ回路出力を並列にしてループフィルタに接続した。
- 2) また、チャージポンプ回路のソース電流(後述)とシンク電流(後述)の比を、ロック状態の $error$ 信号と ref 信号のパルス幅比の逆数に設定するようにした。
- 3) さらに、チャージポンプ回路のソース電流とシンク電流の比を調整可能とする手段を具備した。

【0006】

すなわち、請求項1においては、位相比較回路、チャージポンプ回路、ループフィルタを有する、入力データに対して半分のレートで動作するハーフレートCDR回路において、上記位相比較回路は、クロックの立ち上がりエッジあるいは立ち下がりエッジの少なくとも一方に対して上記入力データの遷移点エッジの位相差を検出し、該検出した位相差信号を出力する2つの位相差判定信号線と、上記クロックに対応したデータ周期信号を出力する2つのデータ周期信号線とを有し、上記チャージポンプ回路として上記各位相差判定信号線と上記各データ周期信号線とにそれぞれ接続した2つのチャージポンプ回路を有し、上記位相差判定信号線を通るパルス幅と位相差との関係が一定となるように、上記位相差判定信号線を介して上記ループフィルタに信号を送り込むための上記チャージポンプ回路の出力であるソース電流と、上記ループフィルタからデータ周期信号線に通るシンク電流との比を補正するCDR回路について規定している。

【0007】

請求項2においては、上記2つの位相差判定信号線は、正相および逆相のクロック信号の立ち上がりエッジにそれぞれ同期した位相差信号を出力する信号線であり、上記2つのデータ周期信号出力線は、上記正相および逆相のクロック信号の立ち上がりエッジにそれぞれ同期したデータ周期信号を出力する信号線である請求項1に記載のCDR回路について規定している。

【0008】

請求項3においては、請求項1のCDR回路において、前記チャージポンプ回路が、前記ソース電流と前記シンク電流との比を調整するための外部電圧により制御される電流供給手段を有しているCDR回路について規定している。

【0009】

【発明の実施の形態】

本発明による実施の形態の例を、図1を用いて説明する。本実施の形態におけるCDR回路は、位相比較回路PD__2あるいは位相周波数比較回路PFD__2、第1のチャージポンプ回路CP__1、第2のチャージポンプ回路CP__2、ループフィルタLOF、両相単相電圧変換回路DSC、電圧制御発振回路VCOか

ら構成されている。位相比較回路 PD_2 は、図 2 の動作タイミング図に示すように、入力データ Din の遷移点エッジとその直後に来るクロック ckv の立ち上がり点エッジ（図 2 における $\uparrow CK1$ ）との間の位相差を表す第 1 の $error$ 信号 ($error_1$) と、逆位相クロック $ckvn$ （図 2 における $\uparrow CK2$ ）に対する同様の位相差を表す第 2 の $error$ 信号 ($error_2$) との 2 つ、およびデータの周期を表す正逆両位相のクロックに対応する第 1 および第 2 の 2 つの ref 信号 (ref_1 , ref_2) を出力する。すなわち、 $error$ 信号は位相差判定信号として機能し、 ref 信号はデータ周期信号として機能することになる。なお、図 1 において $Dout_1$ は正相のクロックに対応したデータ出力であり、 $Dout_2$ は逆相クロックに対応したデータ出力であり、 $CKout$ は正相クロック信号の出力である。

【0010】

本発明における実施の形態の CDR 回路では、 $error$ 信号のパルス幅は位相ロック時で $(3/2) * T$ (T はデータ周期) であり、 ref 信号のパルス幅は T (T はデータ周期) である。入力データ Din の位相がクロック ckv の立ち上がりエッジが最大 $0.5 * T$ まで遅れると（図 2 において Din が右にシフト）、 $error$ 信号のパルス幅は $(3/2) * T$ から T に近づく。また、同じくクロック ckv の立ち上がりエッジが入力データ Din の遷移点間の中央点に対して最大 $0.5 * T$ まで進むと、 $error$ 信号のパルス幅は $(3/2) * T$ から $2 * T$ に近づく。

ここで、 $error_1$ 信号と ref_1 信号は第 1 のチャージポンプ回路 CP_1 に入力し、 $error_2$ 信号と ref_2 信号は第 2 のチャージポンプ回路 CP_2 に入力する。これらチャージポンプ回路 CP_1 および CP_2 は、 $error$ 信号が $high$ (論理 “1”) の間、信号線 $vcont+$ を介してループフィルタ LOF に電流を流し込み、信号線 $vcont-$ を介してループフィルタ LOF から電流を引き出す。また、 ref 信号が $high$ の間は、信号線 $vcont-$ を介してループフィルタ LOF に電流を流し込み、信号線 $vcont+$ を介して電流を引き出す。 $error$ 信号と ref 信号が共に low (論理 “0”) の場合は信号線 $vcont+$ および $vcont-$ のいずれにも電流は流れな

い。信号線 v_{cont+} および v_{cont-} は、ループフィルタ LOF を形成する抵抗 R_1 と抵抗 R_2 の片端に各々接続されている。位相がロックした状態では、両 $error$ 信号がそれぞれ $high$ の期間にループフィルタ LOF の容量 C_1 に流れ込む総電荷量と両 ref 信号がそれぞれ $high$ の期間に容量 C_1 から流れ出る総電荷量とが釣り合い、信号線 v_{cont+} と v_{cont-} 間の電位差は一定に保持される。すなわち、第 1 のチャージポンプ回路 CP_1 と第 2 のチャージポンプ回路 CP_2 のソース電流（ここでは仮に、 $error$ 信号が $high$ の期間にループフィルタ LOF に流れ込む電流をソース電流と呼ぶ）とシンク電流（ここでは仮に、 ref 信号が $high$ の期間にループフィルタに流れ込む電流をシンク電流と呼ぶ）との電流の比は、位相がロックしている時に電荷量を釣り合わせるために、ロック時の $error$ 信号と ref 信号のパルス幅の比の逆数に設定する。そして、そのソース電流とシンク電流の電流の比は図 2 に示す場合は $(2/3)$ である。一方、入力データ D_{in} の遷移点エッジ間の中央点に対して正相クロック ck_v の立ち上がり点エッジ（図 2 における $\uparrow CK_1$ ）の位相が進んでいる時は $error$ 信号が $high$ である幅が広がり信号線 v_{cont+} および v_{cont-} 間の電位差がプラス側に増加する。

【0011】

入力データ D_{in} の遷移点エッジ間の中央点に対して正相クロック ck_v の立ち上がり点エッジの位相が遅れている時は $error$ 信号が $high$ である幅が狭まり信号線 v_{cont+} と v_{cont-} 間の電位差がマイナス側に増加する。信号線 v_{cont+} と v_{cont-} とは両相単相電圧変換回路 DSC に入力する。両相単相電圧変換回路 DSC は信号線 v_{cont+} と v_{cont-} 間の電位差を、その出力である信号線 v_{cont} の電圧レベルに変換する。信号線 v_{cont+} と v_{cont-} 間の電位差がプラス側に増加すると出力側の信号線 v_{cont} の電位は上がり、信号線 v_{cont+} と v_{cont-} 間の電位差がマイナス側に大きくなると出力側の信号線 v_{cont} の電位は下がる。位相ロック時は出力側信号線 v_{cont} の値は一定値になる。DSC 回路出力側の信号線 v_{cont} は、電圧制御発振回路 VCO に接続されている。電圧制御発振回路 VCO は、データ周期 T に対して、周波数 $f/2$ ($= 1/(2 * T)$) 近傍の周波数で発振し

、その周波数のクロック ckv を出力する。両相単相電圧変換回路 DSC 出力の信号線 $vcont$ が高い電圧になると周波数は上がり、 $vcont$ が低い電圧になると周波数は下がる。このことにより、正相クロック ckv の立ち上がりエッジが、入力データの中央に位置するように調整され、CDR 機能が実現される。

【0012】

図 1 に示した本発明 CDR 回路における実施の形態で使用する位相比較回路 PD__2 の回路例を図 3 に、また第 1 および第 2 のチャージポンプ回路 CP__1、CP__2 の回路例を図 4 に示す。両相単相電圧変換回路 DSC および電圧制御発振回路 VCO は、前者は一般的なオペアンプを用いた加算回路、後者は一般的な LC 発振回路やリングオシレータ回路で構成可能であるためここでは特に例示しない。また、特に上記のような両相ループフィルタ LOF を用いることなく、単相のチャージポンプと単相のフィルタとボルテージフォロア回路を用いて、本発明の CDR 回路を構成し得ることは容易に類推可能である。

位相比較回路 PD__2 は図 3 のように、入力データ Din をラッチ回路 L1 と L2 のそれぞれのデータ入力端子 D に共通に接続する。ラッチ回路 L1 の出力端子 Q (出力信号 $q1$) はラッチ回路 L3 のデータ入力端子 D および排他的論理和回路 E2 の第 1 の入力端子に接続する。ラッチ回路 L2 の出力端子 Q (出力信号 $q2$) はラッチ回路 L4 のデータ入力端子 D および排他的論理和回路 E1 の第 1 の入力端子に接続する。ラッチ回路 L3 の出力端子 Q (出力信号 $q3$) は排他的論理和回路 E1 の第 2 の入力端子および排他的論理和回路 E3 の第 1 の入力端子に接続する。ラッチ回路 L4 の出力端子 Q (出力信号 $q4$) は排他的論理和回路 E2 の第 2 の入力端子および排他的論理和回路 E3 の第 2 の入力端子に接続する。排他的論理和回路 E1 の出力は位相比較回路 PD__2 の $error_1$ 出力信号となる。排他的論理和回路 E2 の出力は位相比較回路 PD__2 の $error_2$ 出力信号となる。排他的論理和回路 E3 の出力端子は AND 回路 A1 と AND 回路 A2 の第 1 の入力端子に共通に接続する。

クロック ckv は、ラッチ回路 L1 のクロック入力端子 C とラッチ回路 L4 のクロック入力端子 C と AND 回路 A1 の第 2 の入力端子に印加する。また、クロック入力 ckv の反転クロックである逆相クロック $ckvn$ は、ラッチ回路 L2

のクロック入力端子Cとラッチ回路L3のクロック入力端子CとAND回路A2の第2の入力端子に印加する。

【0013】

位相比較回路PD__2の動作を、図2を用いて説明する。位相比較回路PD__2としての基本動作は次の通りである。入力データDinの時間中心（データ周期Tの中央の時間点）に正相クロックckvと逆相クロックckvnのそれぞれの遷移エッジが位置した状態を位相が合った（ロックした）と表現する。入力データDinの時間中心から正相クロックckvと逆相クロックckvnの遷移エッジが入力データDinの遷移点間の中央位置から外れた時間量を「位相ズレ幅」と表現し、位相ロック時のerror信号のパルス幅をerror信号の基準幅として、位相ズレ幅をそのままerror信号の基準幅に増減して出力するのが位相比較器の動作である。

error信号は、入力データDinにおいて連続する2つのデータがhigh（論理“1”）からlow（論理“0”）に、またはlow（論理“0”）からhigh（論理“1”）に遷移した場合に出力される。ref信号は、入力データDinにおいて連続する2つのデータがhighからlowに、またはlowからhighに遷移した場合のみデータ周期Tのパルスを出力する。本実施の形態では、入力データDinをラッチ回路L1において、正相クロックckvの立ち上がりエッジ（図2における↑CK1）でラッチする。ラッチ回路L1の出力端子Qからの信号は、図2の出力データq1であり、偶数番のデータはラッチすることにより（位相ズレが無い場合には）データ周期Tの（3/2）倍の幅に伸長される。一方、入力データDinをラッチ回路L2において逆相クロックckvnの立ち上がりエッジ（図2における↑CK2）でラッチする。ラッチ回路L2の出力端子Qからの信号は図2の出力データq2であり、奇数番のデータは（位相ズレが無い場合には）ラッチすることによりデータ周期Tの（3/2）倍の幅に伸長される。出力データq1をラッチ回路L3にて逆相クロックckvnの立ち上がりエッジ（図2における↑CK2）でラッチし、入力データDinの偶数番目のデータを（位相ズレが無い場合、すなわち位相がロックしている場合には）T/2だけ遅延させてラッチ回路L3の出力データq3に出力する。同様に、出力デ

ータ q_2 をラッチ回路 L_4 にて正相クロック ck_v の立ち上がりエッジ (図2における $\uparrow CK_1$) でラッチし、入力データ D_{in} の奇数番目のデータを (位相ズレが無い場合、すなわち位相がロックしている場合には) $T/2$ だけ遅延させてラッチ回路 L_4 の出力データ q_4 に出力する。

【0014】

ここで、出力データ q_2 および出力データ q_3 の排他的論理和を排他的論理和回路 E_1 により求めることにより、入力データ D_{in} の n 番目のデータと $n+1$ 番目 (n は偶数) のデータの排他的論理和出力である信号 $error_1\{n \text{ xor } (n+1)\}$ が得られる。また、出力データ q_1 および出力データ q_4 の排他的論理和を排他的論理和回路 E_2 により求めることにより、入力データ D_{in} の m 番目のデータと $m+1$ 番目 (m は奇数) のデータの排他的論理和出力である信号 $error_2\{m \text{ xor } (m+1)\}$ が得られる。そして、ラッチ回路 L_1 とラッチ回路 L_2 の出力データ周期が (位相ズレが無い場合には) $(3/2) * T$ に伸長されているため、 $error_1$ と $error_2$ の2信号のパルス幅も $(3/2) * T$ に伸長される。信号 $error_1$ と信号 $error_2$ のパルスの立ち上がりエッジは、データの遷移点であり、立ち下りエッジは正相クロック ck_v の立ち上がりエッジ (図2における $\uparrow CK_1$) である。 $error_1$ と $error_2$ それぞれの信号のパルス幅は、データ周期 T に、データの遷移点からクロックの立ち上がりエッジまでの時間すなわち最大 $0.5 * T$ を加えた時間幅となる。

入力データ D_{in} と正相クロック ck_v (または逆相 ck_{vn}) の間の位相ズレが $\pm 0.5 T$ である場合、データの遷移点エッジからクロックの立ち上がりエッジまでの時間が、位相ズレ幅である $0.5 * T$ だけ増減する。したがって、 $error_1$ と $error_2$ の2信号のパルス幅は位相ズレがない場合のパルス幅である $(3/2) * T$ を中心として $(3/2) * T \pm 0.5 T$ となる。したがって、入力データ D_{in} と正相クロック ck_v (または逆相 ck_{vn}) の間の位相ズレ幅が、信号 $error_1$ と信号 $error_2$ のパルス幅の変化量として出力され、位相比較動作が得られる。しかも、信号 $error_1$ と信号 $error_2$ のパルス幅の中心値は、従来の $0.5 * T$ の3倍に伸長され、これら

両信号生成にはラッチ回路L3とラッチ回路L4の出力データq3およびq4の排他的論理和出力を用いる。

Ref信号は、正相クロックckvと排他的論理和回路E3の出力とを入力するAND回路A1の出力である信号ref__1と、逆相クロック(ckvn)と排他的論理和回路E3の出力とを入力とするAND回路A2の出力である信号ref__2とに分けられる。ref__1は、入力データDinのn番目のデータとn+1番目(nは偶数)のデータで遷移がある場合にパルスとなる。また、ref__2は、入力データDinのm番目のデータとm+1番目(mは奇数)のデータで遷移がある場合にパルスとなる。この信号ref__1と信号ref__2のパルスは、データDinと正相クロックckvおよび逆相クロックckvnの位相関係にかかわらず時間幅Tのパルスである。信号ref__1は信号error__1のパルス幅の増減を判別する基準パルスとなり、信号ref__2は信号error__2のパルス幅の増減を判別する基準パルスとなる。

【0015】

図1に示した本発明のCDR回路における実施の形態を構成するチャージポンプ回路の第1の回路例を図4に示す。図1における第1および第2のチャージポンプ回路CP__1およびCP__2とは同じ回路であるためここではCP__nと記述する。これにしたいが、チャージポンプ回路出力に対しても、ここではerror__nおよびref__nと記述することにする。チャージポンプ回路CP__nは、4つの電流源Ip1、Ip2、In1、In2とNMOSトランジスタQN1、QN2、QN3、QN4からなる。チャージポンプ回路の入力であるerror__n信号はトランジスタQN1のゲート電極に印加されており、error__nの反転信号はトランジスタQN2のゲート電極に印加されている。また、ref__n信号は、トランジスタQN3のゲート電極に印加され、ref__nの反転信号はトランジスタQN4のゲート電極に印加されている。トランジスタQN1およびQN2のソース電極は共通の電流源In2の電源VDD側に接続し、トランジスタQN3およびQN4のソース電極は共通の電流源In1の電源VDD側に接続し、トランジスタQN1およびQN3のドレイン電極は電流源Ip1の電源VSS側に接続するとともに出力信号線vcont-に接続する。トランジ

スタQN2およびQN4のドレイン電極は共通の電流源Ip2の電源VSS側に接続すると共に出力信号線vcont+に接続する。

【0016】

本発明のCDR回路におけるチャージポンプ回路の第1の回路例において本実施の形態のCDR回路がロック時にループフィルタ両端のvcont+とvcont-とにおけるソース電流とシンク電流に対する両者の電荷量が釣り合うようにすることができることを説明する。位相がロックしている時のerror_n信号のパルス幅とref_n信号とのパルス幅比は図2に示すごとく(3/2)である。このため、図4のチャージポンプ回路においてはIp1とIn1の電流値を等しくIoとし、Ip2とIn2の電流値を等しく(2/3)*Ioと設定する。この場合、error_n信号がhighの時のソース電流は(2/3)*Io、ref_n信号がhighの時のシンク電流はIoとなる。したがって、信号error_nのパルス幅(3/2)*Tにソース電流(2/3)*Ioを乗じたソース電荷量T*Ioと、ref_nのパルス幅Tにシンク電流Ioを乗じたソース電荷量T*Ioを等しくすることができる。

【0017】

次に、本発明におけるチャージポンプ回路の第2の回路例を、図1と図5を用いて説明する。第1の回路例とはCDR回路のブロック接続は同じであるがチャージポンプ回路を図4のCP_nで示した回路から図5のCP1_nで示した回路に変更したことが異なる。この第2の回路例を構成する図5のチャージポンプ回路CP1_nは、図4のチャージポンプ回路CP_nの電流源Ip1をPMOSトランジスタQP1、電流源Ip2をPMOSトランジスタQP2、電流源In1をNMOSトランジスタQN6、電流源In2をNMOSトランジスタQN5で構成した回路である。トランジスタQP1およびQN6は、トランジスタQP4およびQN8で構成するカレントミラー回路により制御用入力電圧v1で制御され、共通の電流Ioを流す。トランジスタQP2およびQN5は、トランジスタQP3とQN7で構成するカレントミラー回路により制御用入力電圧v2で制御され、共通の電流k*Ioを流す。制御用の入力電圧v1およびv2としては外部から任意の電圧を設定することができる。このことにより、チャージポン

プ回路のソース電流とシンク電流の電流比である k を任意に設定することができる。したがって、ロック時の $error_n$ 信号と ref_n 信号のパルス幅比をこれら外部電圧 v_1 および v_2 により $(1/k)$ に変えることができる。すなわち、入力 v_1 と v_2 に与える電圧により、ロック時の入力データ Din とクロック ck_v の位相関係を調整することが可能になる。

【0018】

【発明の効果】

以上述べたように、本発明の実施の形態によると、入力データとクロックの位相ズレが $\pm \Delta t$ の場合、 $error_1$ 信号と $error_2$ 信号のパルス幅を従来 $(1/2) * T \pm \Delta t$ であったものを $(3/2) * T \pm \Delta t$ にまで伸長することができるようになった。このことにより、動作速度の遅い素子を用いて高速な CDR 回路を構成することが可能となる。

【0019】

また、チャージポンプについても、本発明第2の回路例によると、本発明実施の形態と同様に動作速度の遅い素子を用いて高速な位相比較器を構成することが可能となる効果に加えて、CDR回路がロックした時の入力データ Din とクロック ck_v の位相を調整することが可能となる。この機能により、 $error_n$ 信号と ref_n 信号のパルス幅および、チャージポンプ回路におけるソース電流およびシンク電流値の製造上の誤差を補正し、高速な CDR 回路を安定して供給することが可能になる。

【図面の簡単な説明】

【図1】

本発明による CDR 回路の回路図。

【図2】

本発明における位相比較回路の動作タイミング図。

【図3】

図1の CDR 回路に使用される位相比較回路の回路図。

【図4】

図1の CDR 回路に使用されるチャージポンプ回路の第1の例を示す回路図。

【図 5】

図 1 の CDR 回路に使用されるチャージポンプ回路の第 2 の例を示す回路図。

【図 6】

従来の CDR 回路構成を示す回路図。

【図 7】

従来の CDR 回路における位相比較回路の動作タイミング図。

【符号の説明】

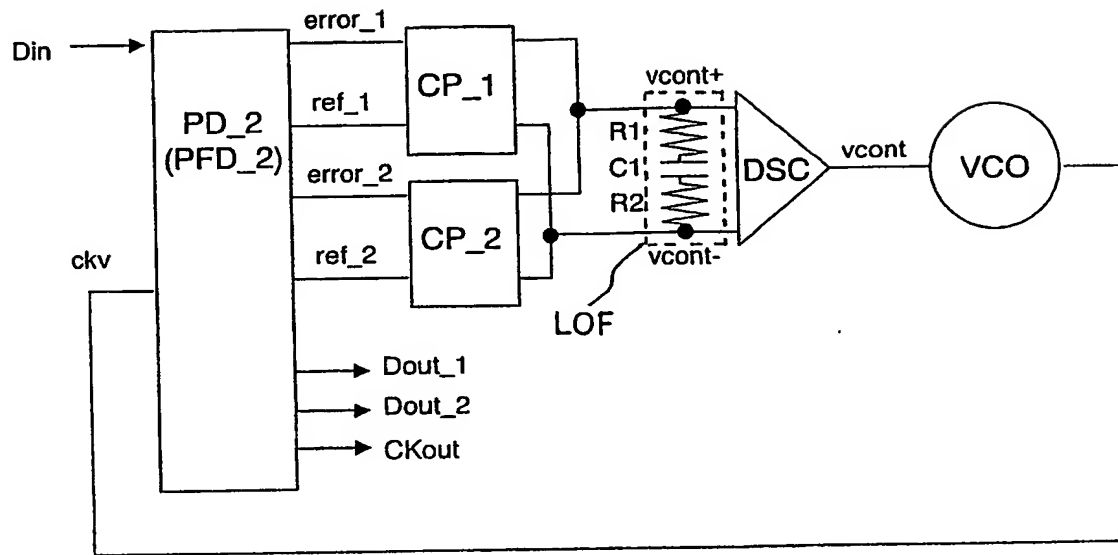
A 1, A 2	: AND 回路
CP, CP__1, CP__2、CP__n	: チャージポンプ回路
ckv, ckvn	: クロック信号
Din	: データ入力信号
DSC	: 両相単相電圧変換回路
E 1, E 2, E 3	: 排他的論理和回路
error__1, error__2	: 位相差判定信号線
In1, In2, Ip1, Ip2	: 電流源
L 1, L 2, L 3, L 4	: ラッチ回路
LOF	: ループフィルタ
PD, PD__2	: 位相比較回路
QN1, QN2, QN3, QN4, QN5, QN6, QM7, QM8	: NMOS トランジスタ
QP1, QP2, QP3, QP4	: PMOS トランジスタ
ref__1, ref__2	: データ周期信号線
VCO	: 電圧制御発振回路
vcont+, vcont-	: チャージポンプ回路出力信号線
vcont	: 両相単相電圧変換回路出力信号線

【書類名】

図面

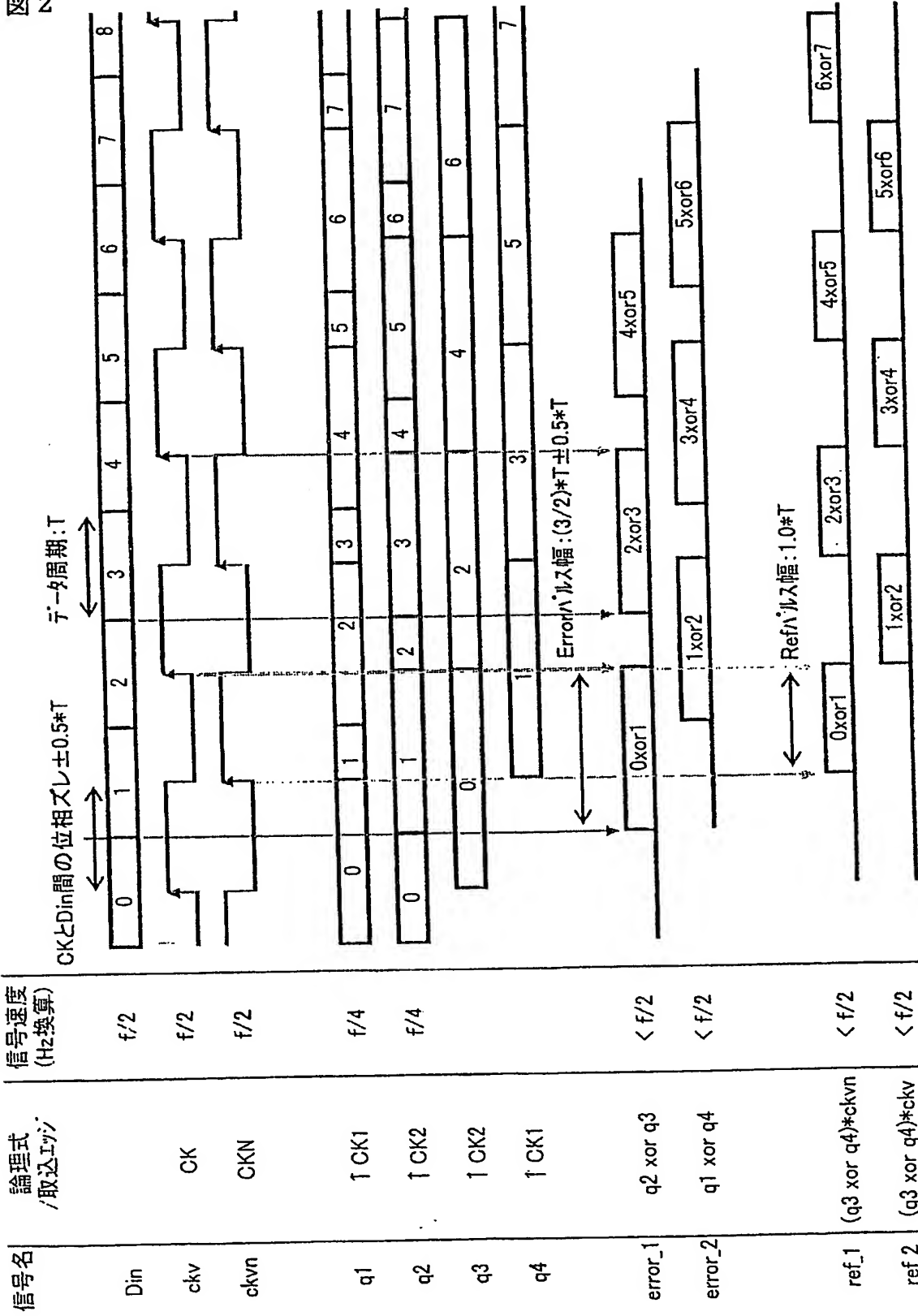
【図 1】

図 1



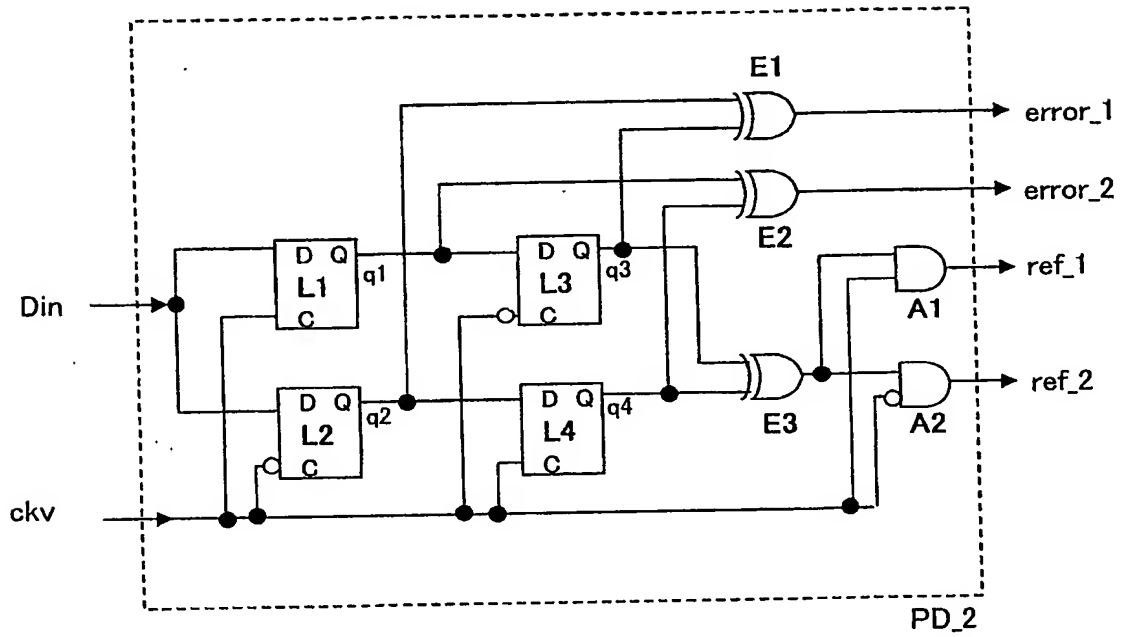
【図 2】

図 2



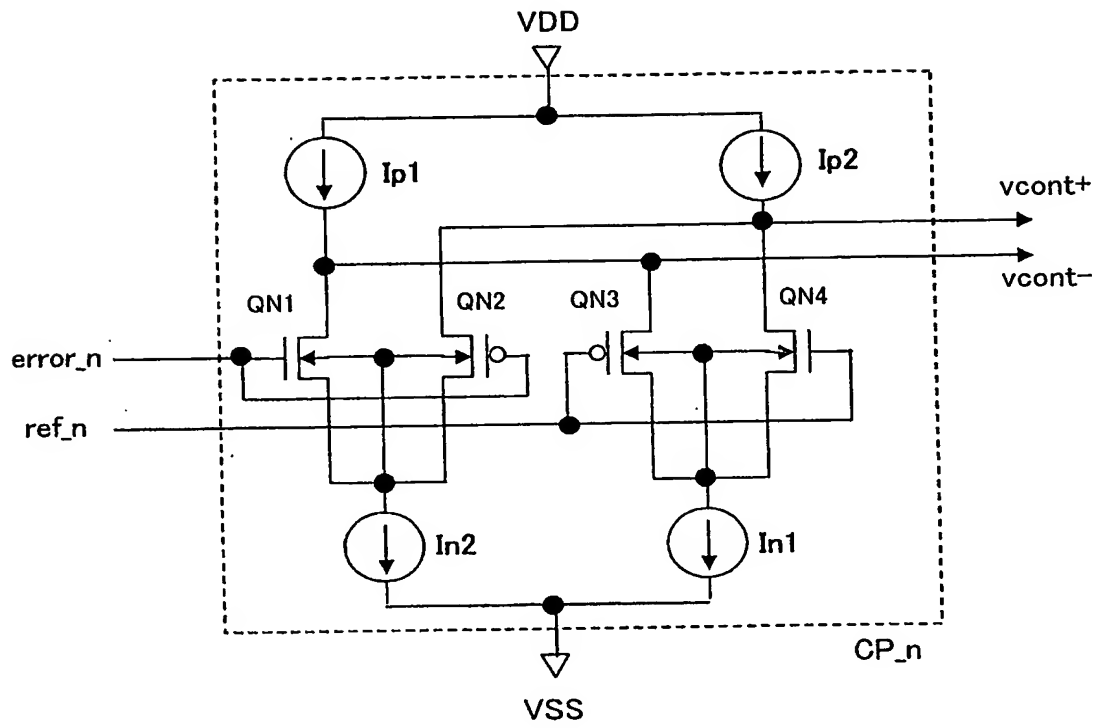
【図 3】

図 3



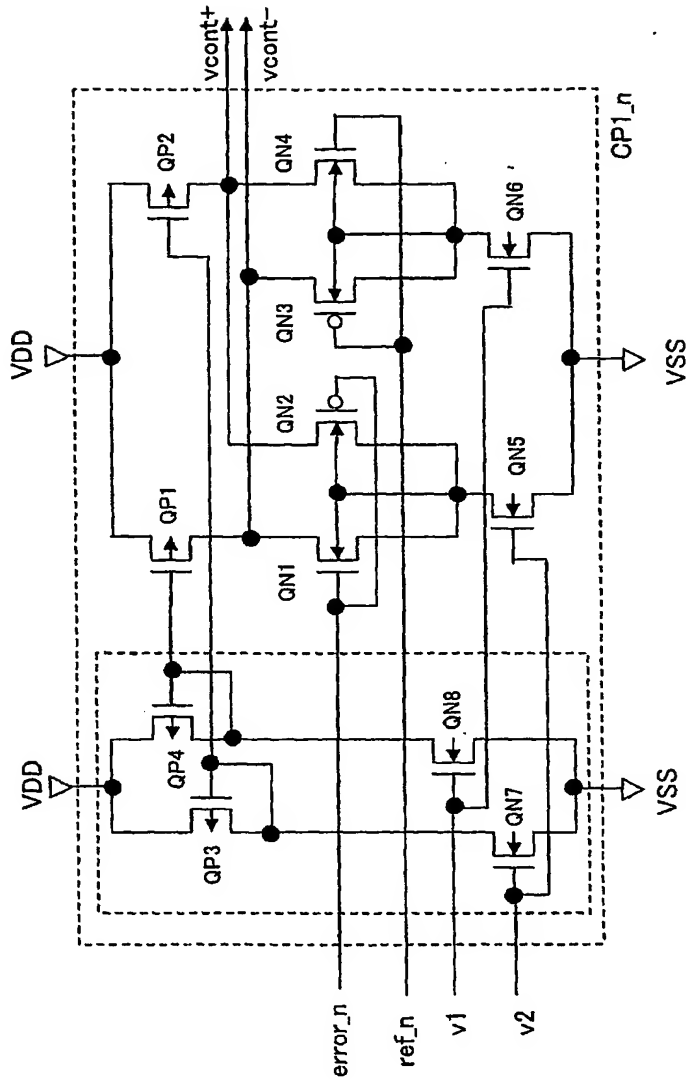
【図 4】

図 4



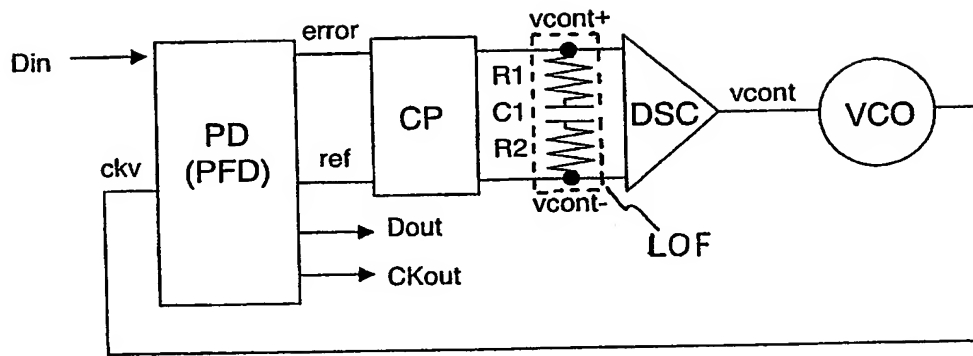
【図 5】

図 5



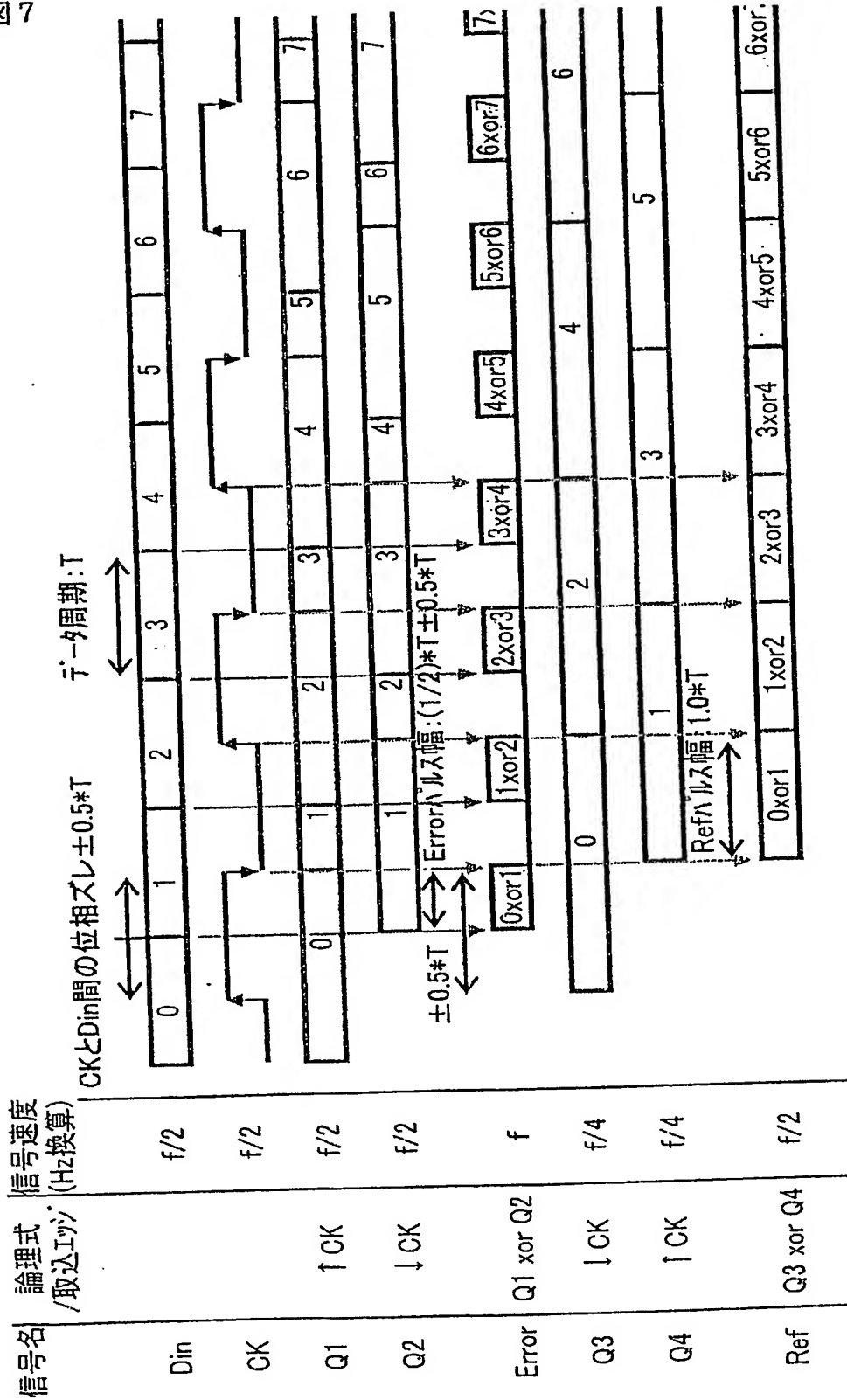
【図 6】

図 6



【図 7】

図 7



【書類名】 要約書

【要約】

【課題】従来のハーフレートCDR（クロックアンドデータリカバリ）回路においては、位相比較回路出力は位相差信号とデータ周期に対応した信号とが各1本ずつであったため、位相差が大になると位相差信号が極めて細くなり、処理回路もデータレートの2倍以上の速度で動作する回路を必要としていた。この動作億度の制限を緩和し、かつ高速動作が可能なCDR回路の実現が課題となっていた。

【解決手段】位相比較回路からは正逆両位相に対応した位相差判定信号とデータ周期信号とをそれぞれ1組ずつ出力し、これら出力にそれぞれ接続されたチャージポンプ回路出力を並列接続してループフィルタに結合する構成とした。また、ループフィルタ容量への充放電量調整用として外部電圧による充放電電流制御部を設け、位相ロック時の充放電電流の調整を可能とした。

【選択図】 図1

特願 2 0 0 3 - 0 7 3 7 2 0

出 願 人 履 歴 情 報

識別番号

[0 0 0 0 0 4 2 2 6]

1. 変更年月日

1 9 9 9 年 7 月 1 5 日

[変更理由]

住所変更

住 所

東京都千代田区大手町二丁目 3 番 1 号

氏 名

日本電信電話株式会社